



Title	有珠火山泥流上の瀛丘
Author(s)	大井上, 義近
Citation	札幌博物学会会報, 4(2), 204-206
Issue Date	1913-04-30
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/60861">http://hdl.handle.net/2115/60861</a>
Type	article
File Information	Vol.4No.2_008.pdf



[Instructions for use](#)

# 有珠火山泥流上の瀛丘

理學士 大井上義近

---

## NUMEROUS CONES ON THE MUD FLOW OF THE USU VOLCANO.

By

Y. ŌINOUE, *Rigakushi.*

---

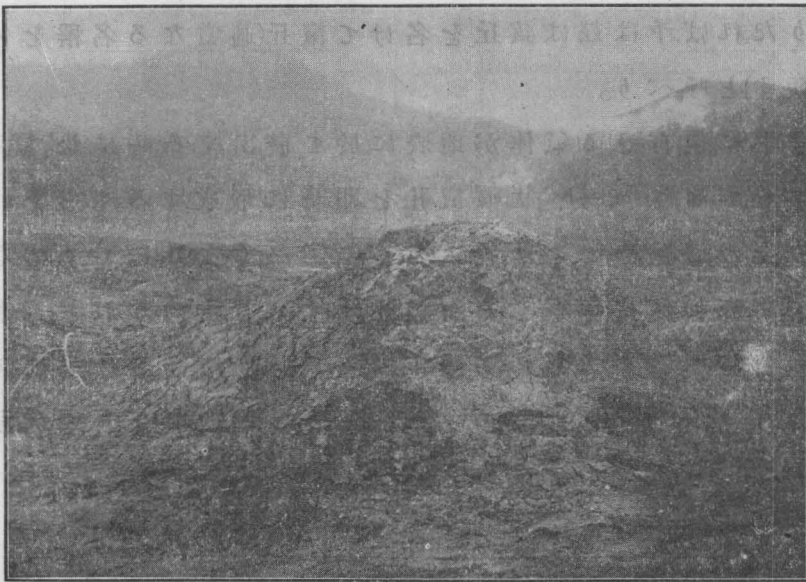
明治四十三年夏期北海道膽振國有珠火山爆裂の際北屏風山北側斜面に於て洞爺湖邊に沿ひ四十有餘の爆裂火口を生じ多量の噴煙と共に幾多の火山彈及び砂灰を抛出せしが猶五火口よりは泥流を溢出せり就中著しきものは西圓山南麓に位せし一火口より流出せしものにして其量に於ても亦噴出回數に於ても他に優るものなり該泥流は嘗て西圓山西麓に住せし中須某の居宅を流し數百の萃樹を埋没せしめ火口より湖邊に至るまで約七百米間厚平均一、五米にして巾約二百米に達し湖中に注入せるものをも合すれば約二十三万立方尺を概算す而して其泥土は當時噴火前地震頻繁なりし時有珠灣内及洞爺湖邊に生じたる泥丘を構成せるものと同一質物にして細粒灰色砂狀のものなり斜長石、紫蘇輝石、普通輝石、磁鐵鑛及赤鐵鑛片等を混有し其他灰色緻密安山岩及黑色粗質安山岩の小塊を交ゆるも此等岩片は質量大なるを以て流下するに當り底部に沈み表面には僅少なりとす。

泥土は噴出當時多量の水分子を含有し温度高く且つ頗る粘着性なりしが漸く日月を経るに従ひ水分は次第に蒸發し土砂は愈々密

着し一ケ年後には足跡を印せざるのみか鍬の如きものを用ゐざれば泥砂を採集する能はざる硬度に變じ従つて表面には不定形の龜裂を生じ極めて扁平なる饅頭狀小突起の波狀を呈して起伏せるを認めしが更らに二ケ年を経たる今日に於ては其饅頭狀突起は漸く泥流面より突出し殆ど該泥流一帯に亘り無數の小丘を形成するに至れり。

小丘の形狀は饅頭狀乃至鐘狀にして大小種々あれども最も大なるものは底邊徑三米高さ一、五米に及ぶものあり小なるものは徑〇、五米高さ〇、一米程にして側面傾斜極めて緩なるものあれども急なるものは四十度に達するものあり而して其頂點には特に縦横に裂目あるも孔形を有するもの甚だ稀なり此等小丘は殆ど一定の配列なく各十米乃至三十米位を距て、一個づゝ散在し異様なる地形を呈せり

有珠火山泥流上ノ汽丘



明治四十五年五月十六日撮影

吾人は澱粉又は小豆粉に水を混じ濃厚に之れを煮沸するに當り最早充分沸騰し粘着質物に變ずれば其中に含有せる水分は瀛泡

となり内部より表面に發出し濃度高きもの程發聲しつつ、破裂し扁平圓錐形火口狀の小突起を造り再び水平の位置に復するを見る。

上記せし西圓山南麓の一爆裂火口は七月下旬より八月初旬に亘り噴火最も熾なる當時は殊に多量に噴水し恰も間歇温泉の如く數分乃至數十分を距て數丈の水柱を昇騰せしめ又屢泥土と共に混じて泥流を成し火口より溢出せしむ而して其泥流は水分及び瓦斯を含蓄せしが冷却すると共に表面に近接したる泥流中の水分及瓦斯体は次第に蒸發し表面は乾燥收縮し龜裂を生ぜるに猶ほ内部には水分及瓦斯体を蓄積し地下尺餘以下の深處に貯へらる水分は長時日を経て初めて氣體に變じ他の瓦斯体等と共に漸次相集合し脹力愈増大するに従ひ抵抗力最も小なる方向即ち地表に其影響を及ぼし之れを押し上げ徐々と地膨れを成し次第に發達して扁平圓錐形小丘を形成せるものなるべし此の如く地表より尺餘以下の内部に無數の蓄瀛所を生じ各其氣體の脹力に應じ小突起を無數に泥流面上に作りたれば予は茲は該丘を名けて瀛丘(適當なる名稱を付せんことを欲す)と呼べり。

溶岩中に包有せる氣體が地表に於て發出する時は恰も月面上に目撃するが如き「マール」狀噴瀛孔を即時に形成するものあれども有珠泥流上の瀛丘の如きは他に多くの例なく本邦にても稀なる現象に屬す將來如何に變形するか猶注意すべきものなれども恐らく今後著しき發達なく次第に浸蝕作用の爲め崩壞せられ平地に化すべし。

(明治四十五年五月中旬稿)